【GD Top100 2026 提出ストーリー日本語訳】

「山岳信仰の精神は杉並木とともに息づく：生きた遺産を自ら定義し、守り、受け継ぐ権利を取り戻す軌跡」

※本資料は、Green Destinationsに提出した英文のストーリーを、申請者側で日本語に訳した参考訳です。文中の引用は英語からの訳であり、発言者の原文とは異なります。

この物語は、日本有数の山岳信仰の拠点である鶴岡市手向地区が、生きた文化遺産の価値をどのように定義し直しているかを紹介する。十年以上にわたる地域主体の実践を通じて、手向は、羽黒山の杉並木、修験道（山岳信仰）の修行の伝統、宿坊、そして手向での日々の暮らしそのものをめぐる物語を、自らの手に取り戻してきた。かつて歴史と組織の境界によって隔てられていたステークホルダーが、「受けたもう（私は受け容れる）」という共通の精神のもとに集い、持続可能な聖地マネジメントに向けてともに歩んでいる。

カテゴリー

文化と伝統（Culture and Tradition）

舞台：デスティネーションと背景

山形県にある手向地区は、羽黒山・月山・湯殿山からなる出羽三山への玄関口、すなわち「門前町」であり続けてきた。山岳信仰の実践として祈りを捧げようとする人々にとって、手向は、聖域である三山に入る前に身を清める場所だった。千年以上にわたり、国内外から人々が訪れ、修行者として鍛錬し、巡礼者として山に登り祈ってきた。同時に地元の人々は、手向で巡礼者を迎え、巡礼者の存在を前提に暮らしを営んできた。

今日、手向の住民はわずか約1,100 人。そのうち約100 人が山伏と呼ばれる修験道の実践者であり、さらにそのうちの40 人は、出羽三山で最も過酷な百日間の山の修行を満行している。ここでは、信仰は特別な行事ではない。日常そのものである。家々は数百年にわたり宿坊を営み、登拝前の巡礼者に、眠り、質素な精進料理をいただき、祈るための休息と準備の場を提供してきた。山伏たちは今も、

何世紀も前と同じように森を歩き、法螺貝の音で呼び交わしている。

羽黒山への石段は1.7km にわたり、樹齢平均300〜600 年の巨杉500 本超の下を2,446 段で登っていく。この参道は1955 年から国の特別天然記念物に指定され、麓の国宝・五重塔とともに、出羽三山を象徴する最も息の長い存在となっている。

出羽三山の存在感が世界に広がるにつれ、その自然と伝統は、ミシュラン・グリーンガイド・ジャポンの三つ星をはじめ、国際的な評価を得てきた。しかし外の世界がどんな名声を与えようとも、山伏たちは山で出会うすべてに、ただ一つの言葉で応え続けてきた。「受けたもう」——私は受け容れる、と。

転機：なぜ変化が必要だったのか

2010 年代以降、手向は、静かに、しかし目に見える形で進む二つの危機に同時に直面してきた。参道とともにある杉の喪失と、コミュニティとしての手向そのものの衰退である。

2019 年の杉の現地調査では、40 本の杉に倒木の危険があると診断された。この調査は、2017 年に倒れた杉が羽黒山の小さな社を半壊させた事案を受けて計画されたものだ。この地の重要な文化資源が損なわれたことで、私たちは杉が直面する危機の切迫性を認識した。しかし、杉の適切な管理には毎年数百万円の費用がかかると見積もられ、手向にはその大きな支出を賄う安定した手段がなかった。

加えて、コミュニティとしての手向は、果てしない縮小と伝統喪失の危機にさらされてきた。最もわかりやすい数字として、江戸時代（1600 年代〜1800 年代半ば）に336 を数えた宿坊は、30 未満にまで減った。人口は10 年足らずで約4分の1 減少し、それに反比例するように空き家が広がる中、手向はその扱い方を見いだせずにいる。観光業の隆盛により、出羽三山への来訪者は絶えない。しかし大半は車やバスで直接山へ向かい、玄関口である手向を通らない。そのため、外から来る人々の支出は町に留まらない。「人は来るが、何も残らない」——文化の保全や観光への投資に充てる経済的資源がないことを嘆く声が、しばし

ば聞かれる。さらに観光は、観光事業者やメディアといった望まぬ外部の者も招いた。彼らは手向をコンテンツに変え、このコミュニティが何を「意味する」のかを決めてしまった。何世紀にもわたってこの聖地で信仰を守ってきたのは私たちのコミュニティであるにもかかわらず、自分たちの物語が手から滑り落ちていくように感じていた。

さらに手向は、150 年以上にわたる分離の歴史とも向き合ってきた。1868 年、国の法令が神道と仏教を分けた。修験道の実践のもとで一体であった神と仏は、神社と寺院として引き離された。以来今日まで、両者はそれぞれの信仰を並び立てて守ってきたが、先人たちが実践していたように一つになることはなかった。

何も変わらなければ、手向は杉と、杉に意味を与える生きた文化の両方を失いかねなかった。

ビジョン：何を目指したのか

未来を変え、コミュニティそのものを持続可能にするために、私たちは一つのシンプルな目標を掲げた。手向の文化と自然は、外部の者ではなく、手向の人々によって決められ、守られ、受け継がれるべきだ――と。

この目標を達成するため、コミュニティの中で長らくそれぞれの持ち場に留まっていたステークホルダーが、伝統の守り方を話し合うために、初めて一つのテーブルにつくことに合意した。出羽三山神社（山岳聖地の中心となる神社）、仏教寺院、宿坊主、住民、市役所、そして外から訪れる研究者である。

また私たちは、信仰と日常生活を「手向」という車の両輪として扱うことにした。この考え方のもと、すべてのステークホルダーは「一方を救わずして、もう一方を守ることはできない」という認識を共有した。さらに「受けたもう」の精神のもとで、この地における来訪者の役割を定義した。ここでの観光客は、景色や資源や労働を買うだけの客ではない。信仰を分かち合い、伝統の継承を担いうる個人である。これらのビジョンの主たる担い手は、自治振興会、

宿坊主、地元企業、そして大学である。

歩み：変化はどのように起きたか

手向の包摂的で持続可能なマネジメントを実現するため、変化は事実とともに現れ、一歩ずつ起きていった。

最初の動きとして、コミュニティの中で分かれつつも水面下で守られてきた神道と仏教のそれぞれの道が、2017 年、並び立つ姿を見せた。1868 年に出羽三山が「神道の山」となった後も、手向の人々は残された寺院とともに、仏教に根ざした文化資源を静かに守り続けてきた。その協力が、出羽三山神社の千仏堂に集い、神仏両方の形式を合わせた祭儀「羽黒法楽」を奉納することで、公の場に現れたのである。

次の動きはテーブルの上で始まった。コミュニティは2021 年、「手向地区価値再発見プロジェクト」を立ち上げた。住民自身がこの地の価値を捉え、多様なステークホルダーを集めることを目的とするものである。この機会を通じて、地域そのものの持続可能性への住民の関心が高まることを期待した。観光客の支出だけでなく、住民の域内消費によっても地域内の経済循環を維持するため、2022 年には17 の店舗と協力して地域通貨「うけたもう」を導入した。世界各地から来訪者を迎える、地元発の自己変容プログラム「Yamabushido」の誕生とあいまって、手向は自らのプレイス・ブランド・アイデンティティを確立する機運を徐々に高めていった。

続いて第二の動きが、私たちの中核となる哲学の源である杉の根元から生まれた。2019 年の杉の診断に続く2022 年の調査で、並木が1955 年の585 本から2022年には558 本へと少しずつ減っていたことが明らかになった。森林調査と並行して、住民はどの文化資源を大切に思うかを問うアンケートに答え、住民自身のために何を守るべきかを見定めた。北海道大学の研究者たちは、宿坊・杉・山岳信仰を一つの「生きた遺産」として記述することを支援した。この動きによって、手向の価値を定義する権利は、ゆっくりと外から内へと戻り始めた。

未来へ何を持続させるかを「再発見」するこうした取り組みの延長として、2023年と2024 年には3 日間のGSTC セミナーを開催し、持続可能性への機運を保ち続けてきた。2024 年のセミナーのフィールドワークでは、一世紀を超える分離を越えて、仏教寺院と神社の双方の宗教者が、持続可能性という文脈のもとで参加した。

地域内の機運は、場所のアイデンティティを守るためのさらなる取り組みへと、主要な担い手を後押ししている。2025 年7 月には、5 者（鶴岡市、手向まちづくり会社、羽黒町観光協会、宿坊組合、手向地区自治振興会）が、場所のアイデンティティと地域の暮らしの持続可能性に焦点を当てた、この地の包摂的なマネジメントに関する協定を締結した。さらに杉を守るため、2025 年9 月から11月にかけて、コミュニティは羽黒山で任意の「入山協力金」の実証実験を行い、来訪者にできる範囲での協力を求めた。

観光事業者や研究者が、人類学研究や観光資源の観点から手向の希少性を認めて以来、この地の価値やスローガンを決めてきたのは、常に外部のステークホルダーであった。しかし、過度な商品化の果てに崩れてしまう前に、自らの場所のアイデンティティを受け継ぐため、ついにそこに住む人々自身の手で、様々な取り組みが始まったのである。

成果：何を成し遂げたのか

最も明確な成果は、最も数えにくいものである。様々な取り組みを通じて、手向の人々は今、自らの山の意味とアイデンティティを、自らの手に握っている。

息の長い取り組みは、手向の文化的アイデンティティにもゆっくりと形を与えていった。2017 年の歴史的な協力は、一つの共有遺産「出羽三山」の守り手として、神仏が取り組みを重ねていく契機となった。そして2024 年GSTC セミナーのフィールドワークの際、講座の参加者全員が、誰も予想しなかった小さな、しかし革命的な瞬間を目撃した。町の寺院・正善院の住職が、神道の祈

りに加わったのである。参加者の多くがこの地の神仏分離の歴史を知っていたからこそ、全員が後に「手向は本当に変わった」と口にした。変化は協力関係だけではない。コミュニティ自身の持続可能性への情熱にも表れている。2023年にGSTCの持続可能な観光のプロフェッショナル認定を取得したのは、コンサルタントとサステナビリティ・コーディネーターだけだったが、2024 年には地元住民を含む少なくとも14 人が同認定を取得した。

文化的アイデンティティの保護と並行して、詳細な杉の調査は、保護に向けて行動することの重要性を正確に浮かび上がらせた。この調査は、私たちの文化資源への当事者意識を育み、来訪者からの資金協力によるコミュニティ主導の基金を設立する原動力となった。この成果は、手向の杉を守る権利が今やその地の人々の手にあることを示す、力強い前進の一つである。

ワークショップの参加者が私たちの変化の大きさを感じたように、手向は今、想像をはるかに超える注目を集めるようになった。任意の入山協力金は、誰にとっても驚きだった。わずか3 か月で2 万2 千人を超える来訪者から、1,500万円（約8 万1 千ユーロ）以上が寄せられたのである。経済的負担が増えるにもかかわらず、約9 割がこの考えを支持し、「こうした協力の仕組みはもっと早くあるべきだった」という声が寄せられた。この実績をもとに、コミュニティは2026 年、杉を守るための「うけたもう羽黒財団」を設立し、2031 年までに公益財団法人となることを目指している。保全がかつて単年度の補助金に頼っていた状況から、コミュニティは今、自らの安定した基金を持つに至った。

基金の設立には、財政的な安定の確保以上の意味があった。仏教寺院と神社の代表者が正式に財団の評議員会に加わったことで、コミュニティは、文化遺産の共同の守り手としての深く共有された当事者意識を、制度として明文化した。10 年前には考えられなかった組織構造をつくり上げたのである。

入山協力金だけでなく、様々な支出がコミュニティに留まり始めた。うけたもう通貨は、人口わずか1,100 人の町で17 店舗を巡り、50 万円（約2,700 ユーロ）相当が流通した。2025 年時点で、Yamabushido プログラムだけでも、外国人参加者34 人により約2,300 万円（約12 万5 千ユーロ、参加者1 人あたり

約67 万6 千円）がもたらされた。自己変容の体験を終えた後も、コミュニティの扉は開かれ続けている。年末の祭り「松例祭」（羽黒山の火の祭儀）に参加するために手向へ戻ってきた人もいれば、2026 年夏からこのコミュニティで暮らし働くためにビザの承認を待つイタリア人女性もいる。この地での観光体験は一瞬の消費ではない。参加者の未来の可能性を広げ、コミュニティの輪を世界へと広げるものである。

こうした成果とともに、コミュニティの内側に誇りが戻ってきた。住民は自宅の庭や家を観光客に開き、表面的な外観だけでなく、自らの文化とアイデンティティを分かち合うようになった。手向は今、変わった。かつてそれぞれの持ち場に留まっていた人々が、今は同じテーブルを囲む。かつて自分たちの故郷を当たり前と思っていた人々が、今は誇りをもってそれを見せる。そして来訪者は、資源の買い手としてではなく、生きた信仰の客人として訪れる。

教訓：学んだこと、他地域へ伝えたいこと

哲学とともに当事者意識を取り戻してきた歩みをもとに、以下の教訓を残したい。

第一に、問題を可視化することが、あらゆる行動の出発点である。明確な数字で課題を可視化したことで、様々なステークホルダーが、一世紀を超えて平行線をたどってきた歴史を越え、同じテーブルにつく決意をした。仏教寺院と神社の協力に象徴されるように、感情だけでは課題は永遠に平行線のままである。事実と感情の共存が、予想もしなかった成果へと私たちを導いた。

一方で、証拠は大きな成果を可能にするが、真の意味で文化を守るには、論理で管理する前に、心と自尊心を整えることが欠かせない。手向を持続可能にするために数値や経済効果だけに集中していたなら、これほど包摂的なブランド・マネジメントの軌跡は実現できなかっただろう。人がどこから来たか、同じ場所を訪れる目的が何であれ、文化とは人間を含めた一つの全体であって、部品の一覧ではない。杉の下で祈る人々や、信仰を生かし続ける宿坊なしに杉だけを救っても、何の意味もない。「受けたもう」の精神が、すべてのステーク

ホルダーを一つのチームとして結び、前に進むための同じ未来像を与えてくれた。
さらに、すべての取り組みを通じて、文化と伝統の持続可能性にとって住民の参加がいかに重要かを実感した。コミュニティが、未来に何を受け継ぐか、そして文化保全の手段としての持続可能な観光の文脈と応用に、自発的に関心を高めてきたからこそ、コミュニティ全体が協力して質を重視する旅行者を招き、持続可能な観光のプロフェッショナル認定を自ら取得することができた。外部の専門家が答えをコミュニティに持ち込んでしまえば、私たちは外部のステークホルダーが生み出した価値に頼るだけの、受け身の状態から永遠に抜け出せなかっただろう。そこに住む人々が、まず自らの価値に名前をつけることが不可欠である。

正直に言えば、これはまだ始まりにすぎない。協力金の仕組みを続けていくこと、祭りを担う若い世代を見つけることは、解決にはほど遠い現実の課題である。しかし私たちは学んだ。未来を恐れるのではなく、受け容れることを選ぶコミュニティは、道を見いだせるのだと。

波及効果：続いていく影響

「受けたもう」の輪は今も、境界を越えて広がり続けている。

何世紀にもわたり手向が喜んで迎えてきた巡礼のコミュニティの新たな一員として、遠方から、さらには海外からの人々が、今や私たちの文化の担い手となっている。驚くような派手さはない静かな形だが、これはかつての手向の姿への回帰である。何世紀も前にこの地がそうしていたように、私たちは多くの巡礼者を迎え、境界を越えてコミュニティを広げていく。私たちにとって観光客はもはや一時的な訪問者ではない。「受けたもう」の哲学とともに、私たちの文化と伝統を受け渡していくコミュニティの一員である。

さらに、私たちのコミュニティ内の資金調達の考え方は、私たちの外でも注目されるべきものである。山岳や文化遺産の地の多くでは、入域料は行政が運営

している。主な例として、日本で最も有名な山の一つである富士山や、世界有数の文化遺産の地であるヴェネツィアが挙げられる。しかし羽黒山の入域料は、私たちのコミュニティが自発的に実施している。この自発的な意思決定によって、うけたもう通貨の導入で証明したように、コミュニティ内で活発な資金循環を実現できるだろう。この事例は、観光とプレイス・ブランディングの力で伝統的な文化コミュニティを財政的に持続可能にする方法を、他の聖地が学べるモデルを示していると私たちは信じている。

手向において、自らの文化と伝統の希少性に気づくまで、「受けたもう」は巡礼者と山伏が山でささやく言葉の一つにすぎなかった。しかし今それは、コミュニティ全体が過去を、来訪者を、そして未来を受け容れる在り方となった。「受けたもう」に共感するすべての人にとって、私たちの手向は、人生の次の章への入口として、ただ扉を開け続けている。

表彰・資料

受賞・認定

・ 松例祭（羽黒山の火の祭儀）：国の重要無形民俗文化財に指定（2014）
・ 日本遺産「出羽三山――生まれかわりの旅」（2016）
・ ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン2019：羽黒山杉並木が三つ星
・ 住まいのまちなみ賞（国土交通省後援、2022）
・ 鶴岡市歴史的風致維持向上計画（第2 期、2023〜2032）の重点区域に指定
・ 持続可能な歴史・観光まちづくりに関する5 者協定（2025）
・ Fodor’s Travel（米国）:「もっと訪問者を待ち望む地」10 選に選出（鶴岡市として）

記事・リンク

・ Yamabushido プログラム：https://www.yamabushido.jp/
・ 観光庁（2025）令和6 年度持続可能な観光推進モデル事業：山伏コミュニティの唯一無二の未指定文化資源を軸とした持続可能な観光地づくり
・ 山形新聞「羽黒山『入域協力金制度』始まる：文化を守る地域主導の資金づくり」（2026 年5 月17 日）
・手向地区自治振興会「手向人」：https://tougebito.net/

地域の声（引用）

「出羽三山は長い歴史の中で、神道と仏教がそれぞれの信仰の形を守ってきた場所です。仏教寺院の副住職が加わり、皆で神道の祈りを唱和したとき、私たちは違いを越えて手向の未来を祈りました。深く心を動かされ、このコミュニティへの本当の希望を感じました。」
——手向GSTC 研修参加者（2024）

「日々の暮らしと信仰を通じて、杉並木の存在は理屈を超えて人の心の奥深くに宿っています。この杉並木の価値は、まさに手向に私たちのような人間がいることにこそあると思います。逆説的に言えば、羽黒山の杉並木の本当の価値は、この木々を心から大切にし、ひたむきに守り続けてきた人々にあるのです。」
——「手向人」2024 年5 月31 日発行

「宿坊の数が減っていくのは避けられません。しかし、絶やしてはならない。文化と伝統、歴史を守り、手向を聖地として未来の世代へ渡すためには、観光客を増やすのではなく、巡礼の本質に触れる来訪者の裾野を広げなければなりません。」
——早坂一広（宿坊大進坊）

「私たちの山岳信仰の文化と伝統は、古くからの講中と、何世紀にもわたりそれを守ってきたこの地の人々から受け継いだものです。Yamabushido プログラムを通じて『新しい講』の輪を広げ、宿坊のある門前町を次の世代へ渡したい。」
——加藤丈晴（株式会社めぐるん）

「観光は地域の目的ではなく、手段です。地域とその文化自身が望む姿を実現するためにこそ、観光の力を使うことが不可欠です。」
——天田顕徳（北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院准教授）